

英国のインクルーシブ教育学のための教師スキーム開発研究

—生徒の多様性課題に向けた対話的教育研究から—

荒巻恵子

（帝京大学教職研究科）

KEY WORDS: インクルーシブ教育学 対話的教育 教師の継続的専門性開発

1. 目的

本研究は、英国を中心に創始される「インクルーシブ教育学 (Inclusive Pedagogy)」という新しい分野のために、英国の対話的教育研究チーム (Hennessy & Kershner ら) が取り組む教師スキーム開発研究の動向を探る。第 1 フェーズとして「インクルーシブ教育学」の創始の背景と多様性への課題、第 2 フェーズとして「インクルーシブ教育学」の方法論の一つである対話的教育 (Dialogic Education) について Teacher Scheme for Educational Dialogue Analysis (T-SEDA) と名付けられた教師のためのリソースパックの開発研究と教師の専門性開発の動向を探る。

2. 研究の第 1 フェーズ

1) インクルーシブ教育学の創始と多様性への課題

英国でインクルーシブ教育を推進する Florian(2015)は、経済至上主義は、高度な学術的標準での国際競争を生み、多くの国々の教育は、競争社会に打ち勝つ人材育成を目標に掲げたカリキュラムや学力調査によって運用される教育制度に本質的な問題があると指摘している。民族、文化、言語、障害、貧困など児童生徒の状態像への学校の対応は、従来にも増して多様であり、不公平であることを危惧している。多様性への課題を児童・生徒間の個人差の問題として対応する問題解決のためには、区別された教育 (exclusive education) か、インクルーシブ教育かの二極に捉われるばかりでなく、その実際や背景にも注目して、インクルーシブ教育について学びなおしをする必要があることを主張し、「インクルーシブ教育学」を提唱している (Florian 2010)。

2) 我が国における多様性の課題と教師の専門性への課題

インクルーシブ教育への課題は、児童・生徒間の個人差の問題としてばかりでなく、世界それぞれの国や地域の異なる課題解決の困難性、複雑性の中で混迷している。また、世界の混迷と同様に、我が国でも課題が多い。

インクルージョンの概念が国連ではじめて主張されたのは 1994 年サラマンカ声明で、その後、2006 年障害者権利条約におけるインクルーシブ教育システムの促進がうたわれた。これによって、我が国においてはインクルーシブ教育が特別支援教育を中心に広がっていった。明治期から続いてきた特殊教育から、新たに特別支援教育への転換がはかられ、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進は、我が国の障害児教育にとっては大きな変革となっている。また、学習指導要領改訂 (文部科学省 2015) においても、インクルーシブ教育システムの理念を踏まえ、子供たちの自立と社会参加を一層推進していくため、「通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある『多様な学びの場』において、子供たちの十分な学びを確保していく必要があり、一人一人の子供の障害の状態や発達の段階に応じた指導を一層充実させていく必要がある」として、インクルーシブ教育に向けた新たな特別支援教育における教育技術の実践が求められる。我が国のインクルーシ

ブ教育を取り巻くこの系譜は、インクルーシブ教育＝特別支援教育であるという偏重した概念がおこっていることは否めない。

一方で、児童・生徒の多様性に対する教師の専門性の課題は、教師の文化的な違いや経験に影響される。教室では、教師の指導方法や児童・生徒の多様性に関する意思決定など、児童・生徒間の個人差の問題のみならず、他にも様々な多様性の変数がある。

3. 研究の第 2 フェーズ

1) インクルーシブ教育学における対話的教育

インクルーシブ教育学が重視することのひとつの方法論に対話的教育がある。Alexander, R.(2004)は対話型教授 (Dialogic Teaching) の研究を進め広く認知されている。教室談話実践研究は、共同思考、弁証法的、対話型教授法研究など、伝統的な教授法から浸透してきており、累積対話の原則 (the dialogic principle of cumulation) に基づいた教授学習を実践するための最も効果的な対話として分類法を用いた類型化がされてきた。教室談話研究は、相互作用の特定の型である探求的会話 (Mercer, 2008)、論証、対話、教師と学習者との意味構成と知識構築の協働活動により高次の思考や知的発達を促進することを追究してきた (Wolfe and Alexander, R. 2008)。

2) 対話的教育研究から教師の専門性研究への動向

英国ケンブリッジ大学 Hennessy & Kershner ら研究者グループによる対話的教育研究は、通常学級の中で、教師がすべての子供たちの学習を達成させるために、教師と子供たちが展開する教室談話 (discourse) と、教室内の多様性に着目した事例研究や自閉症児を対象としたコミュニケーション能力育成のための実践研究を行っている。さらに教師スキーム (Teacher Scheme for Educational Dialogue Analysis:以下 T-SEDA) の開発研究に進み、インクルーシブ教育学における教師の専門性開発を進めリソースの提供をしている。中国語、スペイン語に翻訳され、現在、日本語版の翻訳を進めている。また、T-SEDA には英国ケンブリッジ大学とドイツのイェナ大学が開発した「Perceptions of Dialogic Teaching Scale」が含まれており、これは教師が教室での対話の理解と使用に関する事前・事後の測定として使用できる自己評価尺度で、ドイツでは広範囲にテストされている。今後の研究では多様性の課題は国による多様性の解釈のしかたに違いがあることなど多様性への要因究明に、国際共同研究に期待が集まっている。

＜謝辞＞本研究は、文部省科学研究費助成事業基盤研究 (C) 2020-2023, 20K02976 の助成を受けたものです。

＜主な参考文献＞

TEACHER SCHEME FOR EDUCATIONAL DIALOGUE ANALYSIS

(T-SEDA v. 8a) (2021) 参照日 2021/05/31

https://www.educ.cam.ac.uk/research/programmes/tse-da/T-SEDA_V8a_240321.pdf

(ARAMAKI Keiko)